

小規模特認校における学びと育ち

自分の力を信じ人とふれあえる子どもに

1 子どもの育ちは危機にさらされている

子どもの数は減少の一途だが、いじめ、不登校、虐待の認知数は増え続けている。核家族化と地域社会の解体が進み、外遊びは減り、多様な人間関係を体験する場も少ない。人と関わりたいという基本的欲求そのものが低下しているようにも見える。大量の情報が溢れる社会のなかで、インターネットやゲームに没頭し、イライラを上手に発散できない、他人の傷つきに無関心な子どもが、育つ機会を失ったまま大人になる。全国で小規模学校の統廃合が進むなか、地域の熱い思いを支えに豊かな育ちへの取組が生まれている。

2 子どもの声が響き続けることを願い、見守る地域

富山県の里山にある西広谷小学校。市街地の子も安心して通える学校にと地域住民が陳情し、小規模特認校となった。地元から2人、市内から7人が通い、複式3学級で学ぶ。少子高齢化を迎えても、学校は地域交流の要。地域活性化に欠かせないと住民が学校を盛り立ててきた。地域住民は、草刈りに集まり、珍しい桜、手作りのお菓子、巨大南京など次々に持って来られる。湧水で雪をとかす装置、水力発電の水車も手作り。学校畑を作り、野菜を育て、キノコの菌付け、ゲートボールを教え、炭焼き、わら細工、茶道の手ほどきをして、戦争の話、山を守ってきた話を伝える。保護者も創作劇を演じたり、合同運動会等で地域住民と親しくなり、山菜や畑のことを教えてもらう。地域探検では集落の歴史や自然を子どもたちが聞き取りをして調べ、親も一緒に学ぶ。地域、教職員、親や祖父母に見守られ大切にされ、導かれ、学ぶことを喜んでもらえる子どもたち。安心して人を信頼し、いろんな人と言葉をかかわり、交流する力を育てている。

3 里山が教えてくれる 生きる命とのふれあい

教室に響く野鳥のさえずり。モリアオガエルや山椒魚はプール付近に産卵する。裏山にうど、自然薯、栗、梅、柿、桑の実、あけび。畑には野生動物も来る。用水でアカハライモリやコオイムシを発見。一面に輝くホタルが忘れられない。弟や妹も加わり、1歳から12歳まで群れて遊ぶ。五感で触れて発見したことは鮮やかに心に刻まれ、新たな好奇心を湧き立たせる。

4 盛りだくさんの全校プロジェクト

1年から6年まで会議で意見を言い、グループ毎に寸劇や踊りを考え、小道具や案内状を作る。みんなが主役。力を合せ、発表し、感想を述べる。思いを伝える力が磨かれる。先生は見守り、助言し、一緒に楽しむ。先生の姿を通して、「任されて楽しかった」という思いを深める。努力した結果が、自信と達成感となり、ひとりひとりの体験に積みあがる。

5 異年齢交流・複式学級がふれあう力の原点

明るい挨拶やきれいな話し方が上から下へと受け継がれ、ルールも自然に学ぶ。上の子は助け教えることに誇りを持ち、下の子は上の子を信頼し憧れる。社会に出て様々な立場にたてる準備をする。個性や違いを認め、助け合い思いやる体験が、次の世代を見守り育む力の源になる。複式学級ではわからないまま次に進まない。自分で学ぶ工夫をし、子ども同士で教え合う知恵がうまれる。

5 ランチタイムは家族の団欒

アレルギーや過敏症で食べられない子にきめ細かいサポートがされ、苦手を克服した子をみんなが讃える。四季折々の鍋、誕生ランチ、できたての心遣いに感謝する。スピーチやおしゃべりする子どもたちの話す力を、大家族のような輪が支えている。

6 どの子どもも輝くマリンバ演奏と朝市

マリンバの講師が子どもの特性に合わせて楽譜を手書きされ、全員の音が響きあう曲が創られる。魔法のように力が引き出され、演奏する子どもたちの成長に地域の方が涙される。朝市で売る野菜を地域の方が持ち寄られる。細心の注意を払って袋につめ、お客さんに調理法を説明し、お礼を言う。どんなときでも声を出し汗をかける子になってほしいと、みんなが見守る。

7 この学校で学べる幸せ

伸びて育つ子どもの姿を逃さず語りかけ、文章で表し、認められほめられる喜びを子どもたちに伝える大人たち。口々に「いい学校」と言われ、この学校で学べてよかったと信じる子が育っている。前の学校を休み続けた子に笑顔が戻り、緊張で声が出なかった子が転校して大声で話す。集団になじめず自信を失っていた子が大役を果たす。先生たちもみずみずしい心で教える楽しさを取り戻す。小さな学校にこそ豊かな育ちがある。

学校教育とは、児童に「確かな学力」「豊かな人間性」「健康・体力」をバランスよく身につけさせることにより、変化の激しい社会を生き抜くために必要な「生きる力」を育むこと。

生きる力とは

確かな学力

知識や技能に加え学ぶ意欲や自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良く課題を解決する資質や能力など

豊かな人間

自らを律しつつ、他者とともに強調し、他者を思いやる心や感動する心など

健康・体力

たくましく生きる為の健康や体力など

西広谷小学校は、学校行事を1年生から6年生まで異年齢で子供たちが主体となって行っています。4月の「新入生を迎える会」から始まり「運動会」「ひろたん学習」「学校祭」「朝市」「感謝の集い」「6年生を送る会」などを年長の子供達が自らの体験に基づいて積極的に案を出し、年少の子供達は年長の言動・行動からそのことを学びます。経験の差や体力の差に応じて役割が生まれ、それを果たすことによって充実したものにします。子供達自ら参加し、課題を見つけ、考え、判断し、自ら役割を担いその大切さを実感します。そうした異年齢の関わりが一回限りの単発的なものでなく、毎年行われることによってお世話される側からお世話する側へと役割が移り、ゆっくり長期にわたって継続することがポイントです。

リーダー的な役割をこなすのも一部の優秀な子供だけではなく、そうした経験を積んできた年長の多くの子供たちが体験できます。これは、小さな学校ならではのことで、そういうことが最も大切なことではないでしょうか。体験の中から学び、成長に伴って自覚が生まれ、その役割を果たすことでさらに自信が生まれ、それはどんな子供達にも人と関わる喜びを与えます。またこのような行事が、先生が変わると途切れてしまうようなことはなく同じ水準で実施され、十分な

準備期間を確保し、振り返りの時間も必ず取り、自分達の自信に繋げています。

「朝市」を例にあげると、一か月程前にわくわく会議で目当てと役割分担を決め、これはすべて子供達が挙手をして決めます。役割分担は地域デザイン係と、値段・袋詰め係です。地域デザイン係が、地域の方に配るチラシを制作し、一週間前に行われる学校祭の時に会場の方に呼びかけをし、お願いをします。値段・袋詰め係が、朝市の前日までに地域の方が持って来て下さった野菜の値段を決め、袋詰めをします。値段も相場を知るために、予め授業で近くのスーパーへ行って値段を調べ、工夫しているところや、店員さんを観察したりします。

前日には先生を相手に、売る練習をし野菜の配置の工夫や、お釣りの計算もします。大きな声の出し方や、お客様への対応の仕方などを年少の子供は年長の子供の姿を見て覚えます。朝市が終わると地域の方に感謝の手紙を渡します。

このような段取りは、店長をはじめ年長の子供達が昨年までの経験を生かして取り組んでいます。自分達の、役割を自覚して一生懸命行動したことが年少の子供達のお手本になった、役に立ったと感じた時、また年少の子供達が、年長の子供達のしてくれたことに感謝し、自分もいつかあんな年長になりたいと憧れの気持ちを持つことが、お互いの成長に繋がり、人と関わることが楽しい、つまり「生きる力」を育むのです。

今、子供達を取り巻く環境の中で「社会性の低さ」が問題になっています。この社会性とは、まさに「生きる力」と同じではないでしょうか。

西広谷小学校の活動は「人の役に立つ喜び」の他にも「愛すること」や「責任」も子供達の中に育むことが出来ます。自分のことを愛することが出来る子は、他の人や物を愛することが出来ます。大切にされているという感覚を通して培われる自分や他人への信頼感が生まれるからです。また、自分の仕事を任せられ、それを試行錯誤しながらこなした責任は、生きる術を身に着けていきます。それは自分の身に起こる様々な問題は自分に解決する力があることを知るプロセス、あるいは、自分の手に負えない時には他の人のサポートを仰ぐことを学ぶプロセスになり、自分の人生は自分次第であるということがわかるのです。

子供達の周りに先生や地域の方や親がいて、子供達自身が小さな村社会を作り、時には葛藤を通じて、悩み、傷つき、そして生きる力を育み、大きな社会に出る準備をすること、それが教育ではないでしょうか。